

今は昔、木津川べりに隔離所があった。もともとは伝染病患者を収容するところであつたらしいが、当時はドイツの捕虜が住んでいた。

かなりゆるやかであつた。みえて、鉛筆型の箱には見張りの歩兵が立っていたし、その前の大阪製鉄側には駐在所もあつたけれど近くの屠殺場から大きな骨付の牛肉が運び込まれていたし、高い塀の中ではフットボールに興じている姿が見えた。

大人達が血を飲んでいってのはおそろくワインだらう。

私達が天満宮の境内で遊んでいるとパンを運んできた人が弁当を作つていて、指をくわえて見ているとその端

《随想》

新今昔物語

(1)

山北与三郎

草入れの罐はリッチモンドのそれであつた。

をくれた。今の食パンより色が黒くて随分固かつた。

ゴミ捨場へ遊びに行くと、

美しい色刷りのオペラかなにかの本があつたり、香水の空

瓶など拾って帰ると叔母達が水を入れて着物に振りかけていた。又、後年私が中学に上

がるようになって解つたのだが、祖母の使つていた刻み煙

モデルシップがあつて、造船の技術者でないといふ出来ないうな精巧なものであつた。いつの日か火事があつて燃えさかるバラックの屋根の上で何人かの捕虜が消火に つとめていたのが印象に残る。その後どこへ行つたのか、あとには五位鷺がオイオイと鳴いていた。

青島あたりの現地召集兵だつたらしいが、捕虜の中には器用な人もいて、私の隣家にはボール紙とビール箱で作つたメートル以上もある様な

今回から大正区昔語りとして山北与三郎氏に「新今昔物語」を執筆していただく事になりました。前回「大正区昔語り」同様、御愛読下さいますようよろしく願ひします。